

ひまわり

大鳥 秀高

僕は走る

まっすぐな一本道

ひたすらに 一生懸命に

僕は、毎朝、電車で小学校に通う。駅まではまっすぐな一本道で、線路沿いに二〇〇メートル。僕の家の庭から見渡せる。庭を出ると踏切がある。なかなか開かないあかずの踏切だ。イライラ。そして踏切が上があれば、「よおい、ドン。」僕は駅まで全力で走る。

僕の父は町医者で、朝早くから診察の前に往診に出かける。母は父の診療所を手伝っていて、僕が出かける頃には、もう家にいない。

僕は、いつも祖父に見送られる。祖父は僕の家の近くに住んでいて、僕が出かける頃に来てくれる。だから、淋しくはない。

幼稚園へは、いつも祖父と手をつないで行く。祖父は走れない。それで、ゆっくり歩く。公園を通り抜けて行くのが近道で、公園でひとしきり遊んで幼稚園へ行く。幼稚園に行くのは、楽しく、大好きだ。

公園には遊具は無く、たくさんの木が生えている。中でも僕は、どんぐりの木がお気に入りだ。秋には毎日、祖父と拾ったどんぐりの大きさを競争する。二人でひたすらに、一生懸命

に探す。そして、いつも僕が勝つ。「やったあ。」

その頃は、毎日勝つことが不思議だとは思えず、ただ無邪気に喜んでいた。今にして思えば、祖父は僕を勝たせようと、自分はわざと小さいどんぐりを拾い、僕に大きいどんぐりを拾わせていたのだろうか。

僕は小学校へ上がる。祖父は僕の支度ができるのを、庭で水やりをしながら待っている。そして、僕が走っていくのを姿が見えなくなるまで見送る。「走るの早うなったなあ。」

夏になると、踏切が開くまで毎朝、庭のひまわりの前に立たせ、背比べをさせる。「大きくなったなあ。」僕が大きくなったのを感じているのか、ひまわりが大好きや。夏の暑い時に、他の花がへばっているのに、太陽に向かって、まっすぐ、ひたすらに、一生懸命に伸びている。そして、黄色い太陽みたいに輝く花を咲かせる。そんな人にならなあかん。」

祖父がこの庭に来れなくなつて、一年が経つ。祖父はもういない。夏になり、ギラギラと太陽が照りつける朝、ひまわりは咲く。まるで僕にほほえみかけるように。いつも見守つてくれた祖父の温かいまなざしと深い愛、当たり前だった幸せな朝がよみがえってくる。

「いつもありがとう。」

言えなかつた言葉。胸にかかえて、

僕は走る。

まっすぐな一本道

ひたすらに 一生懸命に

僕は走る。